

6331-157

平成14年2月28日

各関係機関長

各病害虫防除員 殿

宮崎県病害虫防除所長

平成13年度病害虫発生予報第11号について

平成13年度病害虫発生予報第11号を発表したので送付します。

平成13年度病害虫発生予報第11号

向こう1か月間における農作物の主な病害虫の発生動向は、次のように予想されます。

○ 発生予報の概要

作物名	病害虫名	発生量	本文での
		平年比	記載ページ
早期水稻	スクミリンゴガイ	やや多	P 2
冬春キュウリ (ハウス促成)	べと病	やや多	P 2
	褐斑病	やや多	P 2
	灰色かび病	やや少	P 2
	ミナミキイロアザミウマ	並	P 3
冬春キュウリ (半促成)	べと病	やや多	P 3
	褐斑病	やや多	P 3
	灰色かび病	やや少	P 3
	うどんこ病	並	P 3
	ミナミキイロアザミウマ	並	P 3
冬春ピーマン	斑点病	並	P 4
	うどんこ病	やや多	P 4
	アザミウマ類	やや多	P 4
冬春トマト	灰色かび病	並	P 4
	葉かび病	並	P 4
	ハモグリバエ類	やや少	P 5
	コナジラミ類	並	P 5
冬春イチゴ	うどんこ病	並	P 5
	ハダニ類	やや多	P 5
カンキツ	ミカンハダニ	やや多	P 6
茶	カンザワハダニ	並	P 6

○ 3月の気象予報

気温は平年より高い可能性が大きく、降水量、日照時間は平年並の可能性が高い。

(1か月予報 鹿児島地方気象台2/22発表)

○ 発生予報の根拠および防除対策

早期水稻

1 スクミリンゴガイ

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬佐土原町下田島における水稲収穫後未耕起水田での m^2 当たり生貝数は、9.9頭(昨年7.3頭)で昨年よりやや多く、用水路での m^2 当たり生貝数は6.8頭(昨年1.7頭)で昨年より多い。
- 2) 生貝率は、水田では75%(昨年57.5%)、用水路では88.6%(昨年51.5%)で、昨年より生貝率が高い。

[防除上の注意]

- 1) 水田に生息する貝は、耕耘により破碎し防除する。この場合、土壌が硬いほど、耕耘ピッチが小さいほど、貝が大きいほど殺貝効果が高い。耕耘する深さは殺貝効果にあまり違いがないので、貝が主に越冬生息している土壌表層部を浅くとも細かく耕耘することが最も有効である。
- 2) 用排水路からの侵入を防ぐため水の出入り口にネットを設置する。
- 3) 貝の生息が多い場合には、薬剤の育苗箱施用と水面施用を実施する。
- 4) 田植後2~3週間はできるだけ水深1cm以下の浅水管理とする。

冬春キュウリ(ハウス促成)

1 ベと病

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の発生面積率90.9%(平年80.6%)は平年より多く、発病葉率19.4%(平年24.3%)は平年並である。
- 2) 3月の気温は平年より高いと予想されている。

[防除上の注意]

- 1) ハウス内の換気を良くし、過湿防止に努める。
- 2) 草勢の衰えは発生を助長するので、肥料切れしないよう、肥培管理に注意する。
- 3) 多発すると防除が困難なので、薬剤防除は予防散布や初期防除に重点を置く。

2 褐斑病

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の発生面積率63.6%(平年26.5%)は平年より多く、発病葉率10.2%(平年3.9%)は平年よりやや多い。
- 2) 3月の気温は平年より高いと予想されている。

[防除上の注意]

- 1) ハウスの換気を十分行い、灌水も過多にならないようにし、高温多湿を防止する。
- 2) 老化葉は早めに除去し、通風を図り、被害葉や被害残さの処理を丁寧に行う。

3 灰色かび病

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の発生面積率9.1%(平年46.2%)、発病果率0.2%(平年3.2%)は平年より少ない。

[防除上の注意]

- 1) ハウス内の換気を良くし、多湿防止に努める。
- 2) 発病果、被害茎葉は伝染源となるのでハウス外に持ち出し、処分する。
- 3) 曇雨天が続く場合はくん煙剤を使用し、ハウス内の湿度を高めないように努める。
- 4) 薬剤耐性菌が出現しやすいので作用性の異なる薬剤のローテーション使用を行う。

4 ミナキイロアザミウマ

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の発生面積率9.1%(平年20.0%)、1葉当たり虫数0.4頭(平年0.6頭)は平年よりやや少ない。
- 2) 3月の気温は平年より高いと予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 常に観察を行い低密度のうちに防除を行う。

冬春キュウリ(半促成)

1 ベと病

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の発生面積率25.0%(平年22.3%)は平年並、発病葉率3.6%(平年1.4%)は平年よりやや多い。
- 2) 3月の気温は平年より高いと予想されている。

[防除上の注意]

1) 冬春キュウリ（ハウス促成）に準じる。

2 褐斑病

[予報の根拠]

1) 2月中旬の発生面積率25.0%（平年21.3%）、発病葉率0.6%（平年0.9%）は平年並である。

2) 3月の気温は平年より高いと予想されている。

[防除上の注意]

1) 冬春キュウリ（ハウス促成）に準じる。

3 灰色かび病

[予報の根拠]

1) 2月中旬の巡回調査では発生未確認（平年は発生面積率14.9%、発病葉率0.7%）で、平年よりやや少ない。

[防除上の注意]

1) 冬春キュウリ（ハウス促成）に準じる。

4 うどんこ病

[予報の根拠]

1) 2月中旬の発生面積率12.5%（平年19.3%）は平年並、発病葉率0.1%（平年1.8%）は平年よりやや少ない。

2) 3月の気温は平年より高いと予想されている。

[防除上の注意]

1) 空気の停滞によって発生しやすいので換気を充分行う。

2) 加温機のまわり等の発生しやすい場所の葉裏に注意し、初発を見たら速やかに防除する。

5 ミナミキイロアザミウマ

[予報の根拠]

1) 2月中旬の発生面積率12.5%（平年1.4%）、10葉当たり虫数1.1頭（平年0.3頭）は平年より多いが、高岡の1ほ場以外は微発生である。

2) 3月の気温は平年より高いと予想されている。

[防除上の注意]

1) 冬春キュウリ（ハウス促成）に準じる。

冬春ピーマン

1 斑点病

[予報の根拠]

1) 2月中旬の発生面積率45.5%（平年39.6%）は平年並、発病葉率0.7%（平年5.0%）は平年より少ない。

2) 3月の気温は平年より高いと予想されている。

[防除上の注意]

1) 灌水を控え気味にし、換気を徹底して、ハウス内の高温多湿を防止する。

2) 摘葉・整枝を行って過繁茂にならないよう注意する。

2 うどんこ病

[予報の根拠]

1) 2月中旬の発生面積率63.6%（平年39.0%）、発病葉率6.7%（平年4.3%）は平年よりやや多い。

2) 3月の気温は平年より高いと予想されている。

[防除上の注意]

1) 乾燥条件下で多発しやすいので、過度の乾燥を避ける。

2) 暖房機周辺が高温となるため発生しやすい。多発すると防除は困難なので、早期発見に努め、初期防除を徹底する。

3 アザミウマ類

[予報の根拠]

1) ミナミキイロアザミウマの2月中旬の発生面積率45.5%（平年45.9%）は平年並、10花当たり虫数2.7頭（平年2.0頭）は平年よりやや多い。

2) ヒラズハナアザミウマの2月中旬の発生面積率54.6%（過去9年平均27.4%）、10花当たり虫数14.3頭（過去9年平均4.7頭）は過去9年と比較して多い。

3) 3月の気温は平年より高いと予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 常に観察を行い、低密度のうちに防除を徹底する。
- 2) 作用性の異なる薬剤を輪番使用する。

冬春トマト

1 灰色かび病

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の発生面積率10.0% (平年19.4%) は平年並、発病果率0.1% (平年0.4%) は平年よりやや少ない。

[防除上の注意]

- 1) ハウス内の換気を良くし多湿防止に努める。
- 2) 発病果・被害茎葉は伝染源となるのでハウス外に持ち出し処分する。
- 3) 曇雨天が続く場合はくん煙剤を使用し、ハウス内の湿度を高めないように努める。
- 4) 薬剤耐性菌が出現しやすいので、作用性の異なる薬剤を輪番使用する。

2 葉かび病

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の発生面積率20.0% (平年12.8%) は平年よりやや多く、発病葉率0.4% (平年1.0%) は平年並である。
- 2) 3月の気温は平年より高いと予想されている。

[防除上の注意]

- 1) ハウス内の換気を良くし多湿防止に努める。
- 2) 過繁茂は発生を助長するので、古葉は除去する。

3 ハモグリバエ類

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の発生面積率は30.0% (過去7年平均38.8%)、被害葉率は0.7% (過去7年平均5.5%) で、過去7年よりやや少ない。
- 2) 3月の気温は平年より高いと予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 多発してからの防除は困難なので、発生初期の防除を徹底する。なお本虫は薬剤抵抗性を獲得しやすいため、同一薬剤を連用しない。
- 2) 被害葉・整枝後の残さには卵や幼虫が寄生しているので、ハウス外に持ち出し処分する。

4 コナジラミ類

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の巡回調査では4ほ場で発生を確認したが、10葉当たり4頭以下の微発生である。(平年は、発生面積率0.9%)
- 2) 3月の気温は平年より高いと予想されている。

[防除上の注意]

- 1) シルバーリーフコナジラミはオンシツコナジラミに比較して、繁殖力が旺盛で薬剤に強い。早期発見に努め、低密度のうちに防除を行う。

冬春イチゴ

1 うどんこ病

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の発生面積率18.2% (平年33.3%)、発病果率0.5% (平年1.6%) は平年よりやや少ない。
- 2) 3月の気温は平年より高いと予想されている。

[防除上の注意]

- 1) はじめは葉裏に発生しやすいので発病葉の早期発見に努め、初期防除を徹底する。
- 2) 激しく発病すると防除がきわめて困難になるので、予防散布に重点を置き、発病後は散布間隔を短くするなど防除を徹底する。
- 3) 発病果など被害部は伝染源になるので、早めに取り除き、ほ場内に放置しない。

2 ハダニ類

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の発生面積率54.6% (平年41.6%)、寄生株率14.4% (平年7.1%) は平年よりやや多い。
- 2)

3月の気温は平年より高いと予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 寄生密度が高まってからでは防除が困難なので、早期発見に努め、低密度時から部分散布を行うなど防除を徹底する。
- 2) 下葉からの発生が多いので、下葉かき後に薬剤散布を行い、薬剤の到達性を高め散布ムラを少なくする。
- 3) 薬剤抵抗性発達防止のため、作用性の異なる薬剤を輪番使用する。

カンキツ

1 ミカンハダニ

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の発生面積率51.8%（平年45.5%）は平年並、寄生葉率9.3%（平年6.7%）は平年よりやや多い。
- 2) 3月の気温は平年より高いと予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 越冬密度の高いほ場や冬季マシン油を散布できなかったほ場では、春季（3月上中旬、萌芽前）にマシン油による防除を行う。

茶

1 カンザワハダニ

[予報の根拠]

- 1) 2月中旬の摘採面における発生面積率33.3%（平年38.7%）、寄生葉率2.7%（平年4.0%）は平年並である。
- 2) すそ部における発生面積率53.6%（過去7年平均59.7%）は過去7年平均並、寄生葉率5.3%（過去7年平均8.2%）は過去7年平均よりやや少ない。
- 3) 3月の気温は平年より高いと予想されている。

[防除上の注意]

- 1) 防除適期は、増殖が始まる前の密度の低い時期（3月上中旬）で、株の内部やすそ部の葉裏に多く生息しているので、十分な薬液が到達するように丁寧に散布する。

○その他

- 1) 防除等の詳細は「平成13年度病害虫、雑草防除等指導指針」を参照する。
- 2) 農薬の使用に当たっては農薬安全使用基準を遵守し、使用者自身及び周辺環境に対する危被害の防止に努める。特に土壤消毒用くん蒸剤の使用に当たっては、取り扱うくん蒸剤専用のマスクを着用するなど十分な安全対策をとること、くん蒸期間・ガス抜き期間を十分確保すること、周辺環境にガスが漏れないようにすること、その他くん蒸剤のラベルに記載されている注意を遵守することが必要です。また水質汚濁性農薬ベンゾエピン剤（商品名：マリックス乳剤・粒剤等）は使用しない。

3) 発生量（程度）の区分

多い（高い） やや多いの外側10%の度数の入る幅

やや多い（やや高い） 平年並の外側20%の度数の入る幅

平年並 平年値を中心として40%の度数の入る幅

やや少ない（やや低い） 平年並の外側20%の度数の入る幅

少ない（低い） やや少ないの外側10%の度数の入る幅

（平年値は過去10年間の平均）

○お知らせ (<http://www.jppn.ne.jp/miyazaki/>)

病害虫防除所ではホームページで情報を提供しています。予察情報の根拠となる地域別調査データ、防除対策等を登録しています。是非ご利用ください。

（最近の追加登録内容）

- ・ 農薬の剤型とその特徴
- ・ 農薬希釈早見表
- ・ 病害虫写真館にコナガを登録

Back